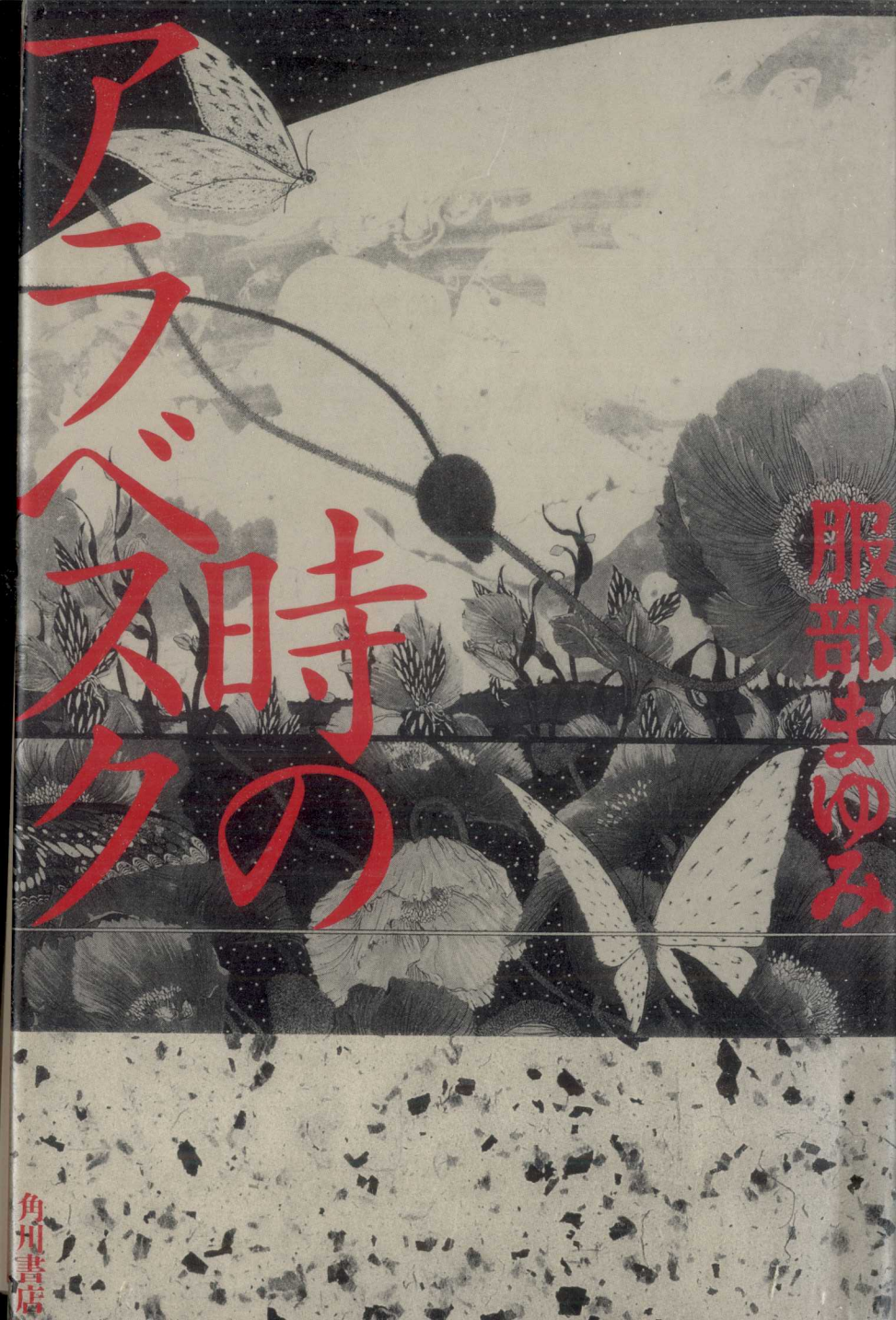




ア ラ ベ ス 時 ク の

服部
まゆみ

アリスベスク
時の服部まゆみ

角川書店

蔵書



時のアラベスク

昭和六十二年五月十二日初版発行

著者——服部まゆみ

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一―三―三

〒102 振替東京三―一九五二〇八

電話／営業部〇三―三三八―八五二一

編集部〇三―三三八―八四五一



印刷所——新興印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

装画——服部まゆみ

装丁——鈴木一誌

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan ISBN4-04-872464-9 C0093

時のアラベスク

我々は多くの真実に似た虚偽を話すことが出来る
しかし我々はその気になれば真実を宣べることが出来る

ヘシオドス—神統記より

時のアラベスク
目次

第 八 章	第 七 章	第 六 章	第 五 章	第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章	プ ロ ー グ
文 ^ふ	水 ^み	阜 ^さ	卯 ^う	弥 ^や	如 ^き	睦 ^む	極 ^{ごく}	
	無 ^な			よ	さ			
月 ^{づき}	月 ^{づき}	月 ^{づき}	月 ^{づき}	生 ^い	月 ^ぎ	月 ^{づき}	月 ^{げつ}	

二七 二四 二八 二二 五 四 三 二 一

第九章

葉^は

月^{づき}

三
五

第十章

長^{なが}

月^{づき}

三
六

第十一章

神^{かん}

無^な

月^{づき}

三
七

第十二章

霜^{しも}

月^{づき}

二
七

エピソード

二
九

受賞のことば

二
九

選評

二
九

横溝正史賞受賞リスト

三
〇

【登場人物】

根岸 亮 りょう

主人公であると共に語り手、僕。
T大大学院で応用物理を専攻。

家族はJ航空に勤務する父と、母・夏子。そしてミイという猫。

小磯 千秋 こいそ

亮の従姉妹。J美大入学と同時に神戸から上京。
父はJ航空大阪支店勤務。母・和江。

小磯 昇

千秋の弟。千秋の二年後、N大芸術学部、映画科に入学、上京。

澤井 慶 さわい

亮の幼馴染みて親友。小説家。

澤井 太一

慶の父。文芸雑誌「風」の編集長。

澤井 義則

太一の弟。シナリオライター。

澤井 喜美江

義則の妻。

澤井 重男

義則の息子。

佐伯 英次 さえき

映画監督。慶の小説を映画化しようとする。

佐々木 春美

イラストレーター。慶の小説の装丁をする。

小山田 輝夫

カメラマン。

糸越 魁 いとこ

澤井慶のファン。

小泉 さん

グイ・バー(a m i)のママ。

トシ坊

(a m i)のパートナー。

佐藤 さん

澤井太一の家の家政婦。

プロローグ

満開の桜の花がはらはらと散り始め、白い絨毯^{じゅうたん}となった石段の割れ目からは（野辺の小さなライオン）タンポポが顔を出していた。

昨夜の雨に洗われて道端^{みちばた}の緑も、眼下の屋根も、通^すりも、全てが光り輝いて見える。

思わず足を早めて階段の途中の路地に入るとここはまだ冬の世界、北向きの斜面に詰め込まれた家は影を被^{かぶ}せ合い、光のない谷間は昔の写真のようにセピア一色に見える。相変わらず雑然としてい^る。風までが北風だ。

錆^{さび}の浮き出たアパートの階段はやはり耳障りな音を発^たて、ドアを開けると薄闇^{うすやみ}が私を出迎える。深海のように闇と静寂が支配する部屋だ。春の薫^{かお}りなど微塵^{みじん}も無い。しかしそんなことがなんだろう。予感した通り、郵便受けには白い封筒が輝いていた。

電球を点ける間ももどかしく、封を切る。

女性のように繊細な、しかし見事な達筆――。

——糸越君、お手紙ありがとう！そして何よりもまず、ポートレートのお礼を言わせて欲しい。本当にありがとう！こんな素敵な君なのにどうして今まで出し惜しみをしていたのです？しかしお願いした甲斐がありました。僕は一瞬、あの憂愁の詩人バイロンかと思いました。黒々としたりりしい眉、知性にきらめく切れ長の瞳、引き締まった上品な唇、高い鼻梁——そしてバイロンの知性はそのままに、彼よりも君は数段美しい。精神上的の双子と想っていた君がこれほどまでの美青年であつたことに、僕は悦びと共に、より一層の友情を感じています。——

精神上的の双子……澤井慶と精神上的の双子！胸が熱くなる。私は陶然とこの甘美な言葉に心を溺れさせた！

彼の新刊『夢回帰線』の上に封筒を置くと、私は一語一語、噛みしめるように先を読み続けた。

——先日の君のお手紙、とくに今世紀に名を残す作家として、ジョン・ファウルズを挙げられた慧眼には驚きました。特に『コレクター』に関する記述の鋭い指摘では改めて僕たちの感性の類似を痛感致しました——。

——言葉の端々から彼の愛が伝わって来る。洞窟のようなこの部屋で私は至福の時に酔いしれていた……。違和感しか感じることのなかったこの世界で心底私の言葉に応えてくれる友がいる！それも敬愛してやまぬ作家、澤井慶だ——！なんとという幸せだろう。彼にだったらなんでも言える。彼は

戸惑いも虚ろな返答も示さない。有るのは優しく熱心な共鳴だけ。そう、糸越魁はもう独りじゃない。この小さな隠れ家と澤井慶、それだけで充分だ。

私は手紙を胸に仰向けになった。隙間風が畳を這って頬を撫でる。この部屋は暗い……湿った土壁の匂い……ひんやりした畳……薄闇の漂う小さな私だけの空間……世界一安全な場所、子宮のように私を守り、自由にしてくれる。私は胎児になって正方形の子宮に身を委ねる――。

外は春の陽光に溢れているだろう。

第一章 極月

慶の出版記念会は五時からだった。気に留めていた筈なのに大学の図書室でつい時を忘れ、慌てて一番町の家に帰り着いた時には時計の針はすでに四時を回っていた。

スーツはこれ一着だけというなんの変哲もないダークスーツに着替えていると母の声、従姉妹の千秋から電話だと言う。ネクタイを持ったまま階段を駆け下り、電話に出る。

千秋はすっかり忘れていた映画の待ち合わせ場所を聞いてきた。そういえば今日は土曜日だった。ドラキュラ映画に付き合う約束の日だった。“来週は？”と言うと明日はもう神戸に帰ると言う。そういえば正月もすぐだ。

電話口で平謝りに謝って家を飛び出し、気がつくとは逆の方角に歩いていた。時々散歩がてら岩戸町いわとちょうの慶の家まで歩いていたせいだ。ここから靖国神社やすくにを抜け、飯田橋いだばし、神楽坂かぐらざかを登って岩戸町までだいたい四十分、早足で歩けば三十分かからない。今更戻るのもなんだし、多少遅れても僕は出席すれば良いだけだ。歩いて行くことにする。

イギリス大使館の裏を右に折れると道は上がったたり下がったり、ジェットコースターのようになる。

行き交う人も無くしばらく行くと千秋の住むマンションが見えてきた。白い瀟洒な建物の六階の窓は明るく輝いており、明日神戸に帰るのならちよつと寄つて顔だけでも、とも思ったが、続けて慶のヒステリックに目を吊り上げた顔が浮かび、素通りして靖国通りに出た。

星の瞬き始めた空と混ざり合うように靖国神社の木立が黒くうつそうと茂っている。神社を抜けて飯田橋駅に向かう商店街に入ると、僕と慶の出たM中学、K高校がある。冬休みに入って暗い校庭には人影も無く、校舎もしんと静まり返っている。K高校の校庭には僕と慶が二人でぶら下がって張り出した大枝を折ってしまった檜の大木が黒い影を落としていた。

澤井慶がいつから僕の親友になっていたのか、さだかではない。

小学校入学の時、母から離れられなかった僕を、頭一つちびのくせに隣の席に導いてくれた出会いの時からか、もしくは中学二年の夏休み、宿題の一つだった読書感想文で二人共偶然にブルーストの『失われた時を求めて』を選んだ時からか、とにかく高校の三年間は首席を争いながらも、僕たちは自他共に親友と認め合っていた。そして僕たちはなによりも本を通して多くの事を語り合ったが、ブルースト以降、僕たちの嗜好は徐々に離れ、再び一致することはなかった。彼はそのままW大の国文に進み、在学当時に書いた『悪夢博物館』が推理小説作家の登龍門と言われているN賞を受けて以来、寡作ではあるが一部に根強いファンを持つようになった。

当初は彼の父が純文学雑誌「風」の編集長をしていることから、陰で色々さやかれたらしいが、今年一年振りに出した『魔物たちの夜』は出版と同時に気難しい批評家たちの絶賛を浴び、今や「前途有望なる新進作家」などという形容では追いつかず、「戦後最大の収穫」とまで言われている。

今回も「N賞受賞者の書き下ろしシリーズ」自体が、純文学中心だった博英社からの出版という事で、裏では彼と父親との繋がり^{つな}を言う者もいたらしいが、『魔物たちの夜』が出ると同時にそんな囁^{ささや}きも消えてしまった。

「怪奇小説と純文学の見事な結合」「少年期のリリシズムを筆力豊かにうたいあげた、日本幻想文学史上に残る名作」等々の讃辞^{さんじ}は文壇全体を揺り動かし、あまりの反響に当の本人のほうが驚いている。

それで出版後二か月たった今頃になって遅まきながらの出版記念会、というより、内輪で祝宴でも開こうということになった。

神楽坂の入口に着くと僕はさすがに足を緩めた。息は白く見えるのに、コートを脱いでもよいくらい体は熱い。入口近くに集中したファースト・フードの店は学生が居なくなつたせいか閑散としてゐるが、それでも坂を登るにつれ、歳末セールの立看板や豆電球の点滅するクリスマス・ツリーなど、一番町とは比較にならないほどの賑わ^{にぎわ}いだ。乾物屋の店先の小豆^{あずき}や餅、洋菓子屋のクリスマス・ケーキ、普段は見過ごすような昔ながらの注文製の足袋^{たびや}屋まで正月用のディスプレイで目を引く。酒屋の角を曲がろうとした時、停車音と共に声を掛けられた。

振り返ると狭い坂道に派手な赤いボルシェが止まっている。

「亮君！ 久し振りですねえ。慶の祝賀会に行くんでしょ。乗ってきませんか」

慶の叔父でシナリオライターをしている澤井義則と、運転席に居るのは息子の重男だ。あとの一人

は分らない。

「いや、もうそこですから。どうぞお先にいらして下さい」

「まあいいじゃありませんか。四人で乗り込みましょうや」義則は強引に譲らない。

慶の親戚とはいえ、どうも僕はこの親子が苦手だ。重男はいつも義則の後ろでむつりしているし、義則は騒がしくデリカシーに欠けた言動でつい苛々させられる。今も後続の車がクラクションを鳴らしているのに、狭い上り坂で平然と止めたままだ。

見兼ねて僕は乗ってしまった。僕が乗るやいなや重男は車を乱暴にスタートさせた。あんなに前髪が垂れていて前が見えるのだろうか？

いつだったか慶が「西遊記一家」と言っていた。つまり義則氏は豚、奥さんは猿、重男は河童にそっくりだと言うのだ。悪いが言いえて妙とはこのことだと思ってしまった。助手席の八戒が大儀そうに肉の向きを変え、早速話し掛けてきた。

「ほんと、しばらくですねえ。君まだT大？」

「ええ」

「ああ、そういえば慶が言ってたなあ。大学院でえーと、えー、なんだったっけ？ 専攻は」

「応用物理です」

「はあ、…と言われても見当もつかないけど、それで…学者にでも成るわけ？」

「いえ、まだどうするか……」

「はーん、金持ちは呑気でいいねえ。こちとら年中独楽鼠だよ。あ、そうそう、監督、彼は亮君。」

えっと、何、亮だっけ？ まあいいや。とにかく頭脳明晰、優秀な男でね、慶の親友なんですよ」

僕の隣で体を鋭角に折り曲げるようにして座っていた人物は軽く頭を下げて会釈した。日本人にしてはかなりの長身だ。ひょっとして僕より大きいかもしれない。猫背ぎみの僕に反してシャンと背を伸ばし、仕立ての良いグレーのスーツに絶妙な緑の色合いのネクタイ、実にダンディの見本のような老紳士だ。きれいに後ろに撫でつけた半白の髪と、八の字型の上品な口髭を蓄え、冬だというのに色の濃いサングラスの奥から鋭いまなざしが走る。

義則はまだ一人で喋り続けた。「もう気がついたと思うけど、こちらはあの有名な佐伯英次監督ですよ。映画観てるでしょ」

どうりで見たことがあるような気がした。しかし映画監督なんてものはいつもよれよれの皮ジャンにベレーかハンチングでも被っているもの、と思っていた僕はびっくりしてしまい、「どうも……」とかなんとか間の抜けた挨拶を口籠もったまま、後は「着きましたよ」と不貞腐れたような重男の声に掻き消されてしまった。

慶の家からは煌々と明かりが洩れていた。車を降りた途端、今時珍しい平屋の左端の座敷から、ざわめきが聞こえてくる。

通いのお家婦の佐藤さんの案内で座敷に行くと、十畳、八畳の間の襖を取り払い三十人ほど、既に寛いだ雰囲気満ちている。

慶以外の親しい知人もあまりいない僕は、さっそく空けてくれた慶の隣の席に滑り込み、ほっとし